

# スポーツクラスターの論理とスポーツの象徴性

## ―戦後外苑地区における市民の生活と立ち退き―

### The Logic of Sports Cluster and the Symbol of Sports:

#### Life and Eviction in the Postwar Gaien Area

石 田 智 佳

Tomoka ISHIDA

(日本女子大学人間社会研究科 現代社会論専攻 学術研究員)

#### 要 約

本稿の目的は、「スポーツクラスター」を市民の生活の視点から考える手立てを考えるものである。東京都渋谷区外苑地区は、新国立競技場をはじめ明治神宮野球場や秩父宮ラグビー場などのスポーツ施設が集積する地区である。外苑地区は2020五輪による大規模都市開発を発端に、スポーツクラスターとしてスポーツを中心としたまちづくりを行う指定地区に認定された。これらの都市開発は、未だスポーツが優先的に用いられる中で地域活性化を促そうとする傾向が根強い。一方外苑地区のスポーツ施設が発展してきた歴史を辿ると、戦前から戦後にかけてのスポーツ施設の意味合いの変容や1964五輪の際の市民の生活とのつながりが明らかになった。スポーツを通じたまちづくりの論理は、市民にどのような影響を与えていくのか。この問いに対して、スポーツクラスターを象徴暴力として市民の視座から捉えていく必要性を指摘した。

#### [Abstract]

The purpose of this paper is to consider a way to think about “sports cluster” from the perspective of local citizens. The Gaien area of Shibuya Ward in Tokyo is home to the New National Stadium, Meiji Jingu Baseball Stadium, and other sports facilities. This area has designated as a “sports cluster”, the area for urban development centered on sports, triggered by large-scale urban development due to the 2020 Tokyo Olympics. The logic of these projects still tends to promote regional revitalization while sports are still used as a priority. On the other hand, the history of this area reveals that sports facilities were used in various ways from prewar to postwar periods, and that they were also connected to the daily lives of citizens. Finally, I point out the need to address these findings from the perspective of the citizenry, using the sports cluster as a symbolic violence.

#### 1. はじめに

2020五輪を契機にした東京各地域による都市開発は、新たなスポーツとまちづくりの在り方を提示している。東京都は2020五輪開催が決定するや否や、それを見据え「スポーツ推進計画」を策定して、世界でもトップレベルのスポーツ都市を醸成していくことを打ち出した(東京都,2018)。いわゆるスポーツクラスターは、スポーツを中心にまちづくりを行うこと、例えばスタジアムの建設やプロ・スポーツの誘致、メガ・スポーツイベントの開催などを通して、スポーツによる集客や不動産投資を地域経済活性化の起爆剤とするものである(原田, 2016)。スポーツクラスター

を目指す地区が、東京都にもいくつか点在しているが、その実現は、とどのつまりスポーツによる継続的なまちづくりと地域活性化にある。またその実現は、今後日本全国の大きな課題である「少子高齢化」や「健康増進」といった地域問題の解決にも対応できる都市づくりも兼ねていると言う（大島, 2022）。特に東京都渋谷区明治神宮外苑地区におけるそれは、新国立競技場や明治神宮野球場、秩父宮ラグビー場、東京体育館をはじめとして、都内でも多くのスポーツ施設がふるくから密集しており、スポーツによるまちづくりを積極的に行うべき地域として選定されている。

一方外苑地区の開発をめぐるのは、明治神宮外苑のシンボルである銀杏並木等の樹木伐採や自然景観の喪失が議論されている（森, 2015）。スポーツによるまちづくりは、スポーツが優先的に都市開発の論理に接合されることで、こうした様々な問題が浮き彫りになり、今後の方向性も危惧されている。それは市民にとっても同様であり、例えば急に暮らしを変容させられる形で、大きな問題が内在することも報告されている（Watt, 2013; Kennelly, 2016）。こうした意味でスポーツクラスターは、五輪都市開発と同様にスポーツを優先的に考えてまちづくりを行うという論理が通底している。だがスポーツクラスターの議論は、スポーツによる社会的効果を謳う論調が強く、自然景観や市民の生活に対する議論はまだまだ多くない。

そこで本稿は、外苑地区におけるスポーツによるまちづくり、とりわけその基軸となってきた1964五輪を契機に起こった外苑地区周辺の都市開発とそこで暮らしてきた市民がかつて体験してきた経験に焦点を当てたい。なぜ当時の市民の経験に着目するのか。それは2020五輪の際にも問題になった市民の立ち退きが、1964五輪時にも、外苑地区で起こっていたからである。ある種の頃から市民の犠牲をも厭わない形態でスポーツによるまちづくりはあり、現代においてもスポーツを優先するがあまり市民の内実にもまで迫り切れていないのは事実である（稲葉, 2015; 小川, 2016; 石田, 2020）。つまり外苑地区がスポーツクラスターになるべき地区として選定されたのも、元来同地区が、1964五輪を軸にしたスポーツ中心のまちづくりをし易い基盤を有していたからであろう。すなわちスポーツクラスターの大きな目的は、五輪などのように、「スポーツ」が中心となって煌びやかで新しい建造物を増やし、利便性の高い都市をつくっていくことである。しかし、そこで暮らしていた一部の市民が感じていた土地や景観への記憶や経験は、その都市開発によって風化されていく（畑中, 2020:v）。果たして外苑地区におけるスポーツ施設は時代の中でどのように意味づけられ変容して、そして市民はそれらの変化をどのように享受してきた/せざるを得ないのであろうか。本稿の目的は、外苑地区におけるスポーツ施設の変化を戦前から1964五輪の時代まで遡って述べ、またその大きな転換期となった1964時の五輪都市開発で市民がその変化をどう感じていたのかを述べ、そこから新たにスポーツクラスターを考え議論していくための可能性を提示していきたい。

## 2. 先行研究と本稿の視座

### 2-1. 先行研究の整理と検討

原田（2016）は、「都市経営」の視点からスポーツとまちづくりを論じる。原田がメガ・スポーツイベントの開催やスポーツツーリズムを通して主張するのは、スポーツ需要と親和性の高い都市の創出である。それは住民やビジターが「する」「見る」「支える」スポーツに積極的に関与すること

が可能で、機会に満ち溢れている都市であるという（同：180）。原田は多様な形式でスポーツに触れることのできる都市環境要因の分析、その誘発条件を語り、スポーツ都市の基本コンセプトも含め推進化を図る。その上で地域活性化、地方再生の切り札としてスポーツが有効的に働くと述べ、地域が抱える様々な課題に対してもスポーツを利用した解決策の可能性の大きさを謳う（同：201）。つまり地域経済や人材資源確保、健康課題に至るまでスポーツ都市の実現によってそれらを達成しようとする論考である。大島（2022）も同様、都市経営の戦略としてスポーツを活かしたまちづくりの方法を考察する。大島は都市とスポーツのつながりに着目して、日本全国で今後課題となる人口減少問題を政府が打ち出す「スポーツ・健康まちづくり」を事例に、神戸市のスポーツ政策の検討を論じた。原田の論考を参照しつつ、神戸市におけるスポーツを行う施設環境やインフラ、イベントを含む政策環境づくり、アンケート調査を用いた市民のスポーツ実施の頻度やクラブへの加入状況等を分析する。その結果から、スポーツ都市の実現は日も浅く課題が残ると謳いつつ、地域が様々な人材や施設を確保することが困難な時代にとって、スポーツによるまちづくり効果は大きな有益につながり、スポーツ都市は「地域社会の発展に貢献することを確信している」（同：109）と述べる。両者の論考は、まずスポーツの活性化や発展が優先されることが前提にある。スポーツを活性化できる都市こそが、相乗的に地域を豊かにするのである。「する」・「みる」・「支える」観点を軸にしたスポーツ利用を中心とした都市実現は、地域活性化に不可欠であり、そのために必要な設備投資を行うことがそのまちを変え、支えるのである。これは、東京都が提示する「スポーツ推進計画」をもとにしたスポーツクラスターの論理と大きく通底している（東京都、2018）。スポーツクラスターの論考はスポーツの活性化がまず前提にあり、その結果としてスポーツ利用の達成が地域発展へとつながるのである。

一方鈴木（2012）は、スポーツとまちづくりの関係性を地域づくりを前提に考察した論考をあげる。鈴木は「見る」「する」スポーツを中心に、地域課題解決のためスポーツが用いられてきたことに疑問を呈する。地域で「スポーツは誰のものなのか」という問題意識とともに、イギリスの北ロンドン名門サッカークラブのアーセナルFC、グラスゴーでサッカーを通じた青少年プログラムを運営するUFPという団体に調査を行い、その関係性を問うた。その結果、これまで語られてきたスポーツによって地域がつくられ課題解決の糸口にもつながり得る、という単純図式を否定する。調査で分かったことは、必ずしもスポーツが地域をつくるのではなく地域社会の状況において、その課題解決や地域発展の振り幅はいくらでも大きく変わるということであった。日本においても、暗黙裡にスポーツは地域社会発展のツールとして有効である、という予定論が語られるが鈴木はその順序を転換する必要性を説く。つまりスポーツが地域をつくるのではなく、「地域がスポーツをつくる」という手順での論調である。例えばイギリスにおいては野球やバスケットボールでなく、地域の歴史に根深いサッカーというスポーツに着目するからこそ、団体や地域の社会的関係性に優良な点を垣間見ることができる。両者の関係性は地域状況や歴史、浸透するスポーツの認知度や国民性によっても変わる。そのため、細かな地域社会の状況を鑑みた上で、当該地域においてスポーツが課題解決や活性化のツールとなるのかを、地域主体で議論が検討される必要性を鈴木は主張する（同：15）。この論考は地域にとってスポーツは何か、という前提で議論が考察されている点で本稿に示唆的である。普遍的な地域発展のツールとしてスポーツを捉えず、個別具体的にまず地域を見ることからスタートする点は本稿にも重要である。

和田(2020)も同様に、スポーツとまちづくりの関係について地理学観点から論じている。先行研究から日本のスポーツ利用による都市開発は、戦後の経済効果や地域イメージに有効的であった点を認めつつも、一方で過度な大規模建設と自然破壊や住民環境へのマイナス面も大きかったと謳う。和田はスポーツが功罪両面の影響をもちつつも、いまだ無批判的なスポーツによる地域活性の風潮に疑問を呈した。一面的にスポーツをポジティブに捉えてきた風潮から脱し、必要なのは経済効果ではなく社会効果、つまり多様な社会的関係性を紐解いていく作業がスポーツ都市開発の議論には不可欠であると述べる(同:27)。和田は、原田や大島が述べていたようなスポーツまちづくり論ではなく、鈴木同様、地域を主体としたスポーツがどのような形で語られ地域内に位置しているのかを実証的に分析する必要性を説く。この両研究者の、地域にスポーツを位置付けて都市開発を考察する姿勢は、スポーツクラスターを議論する本稿にとって示唆に富む。地域に焦点を当てると、例えば五輪都市開発による立ち退きやジェントリフィケーションが生起している場では、Watt(2013)も述べるよう従来の地域コミュニティの分断や、市民の手ごろな賃貸物件の減少という住宅空間の変容過程が具体例な問題の内実として報告されている。また大沼(2020)も、過度な五輪都市開発中で市民がどのようにそれらの変化を「生活化」していくのかを捉えることも重要な視点であると述べる(同:299)。原田や大島の論理には、地域に焦点を当てる論考や市民の内実は組み込まれていない。こうした論理は、実際の立ち退きにあう市民の生活変化の経験にまで迫り、スポーツの象徴性を用いたまちづくりの身勝手さをより鮮明に浮き彫りにさせ、議論の俎上に載せてきた。その上で、Kennelly(2016)の論考を参照して本稿の視座を提示していきたい。

## 2-2. 本稿の視座

Kennelly(2016)は2010年のバンクーバー五輪と2012年ロンドン五輪の各会場地域の若者(16歳～24歳)を対象に、そこで彼らが置かれた具体的境遇と五輪都市開発がもたらす弊害の関係性を問うた。若者たちは路上で生計をたてていた低所得者層やホームレスであり、五輪を契機に起こったジェントリフィケーションの被害者であった。その内実として、彼らの生活レベルに沿っていた賃貸や飲食・衣料雑貨店といった「(生活資源)neighborhood resources」の喪失が横行して両地域内の暮らしができなくなっていた。Kennellyは約200人の若者に対し、インタビューやグループディスカッションの機会を設けフィールドワークを行う。そこからKennellyは、若者が都市空間から物理的に締め出されていく構造のより潜在的な部分に迫り、彼らが感じていた都市空間変容への疑念が、彼らの心の内にある複雑性と関連していることを指摘した。Kennellyが見出したのは、彼らがその場に留まっていたい気持ちをもちつつ「自分たちがその場(五輪開催都市の空間:筆者注)にふさわしくない」(Kennelly,2016:12)と、対象者が思い込まされていくプロセスであった。きれいで安全な五輪都市の実現、この理想に市民が寄与していくことは、前提として世間にとっては「良いこと」という認識的優位性が働く。しかしその優位性は若者たちにとって、自分たちは五輪の都市空間イメージに「当てはまらない」対象である、という空間心理を抱かせる。すなわち五輪の祝祭的ムードやその都市空間の雰囲気は、「若者たちが、(自分たちを)一掃される必要のある『汚れた』対象として見なされ、またその事実を黙って従わざるをえない」(ibid:13)状況へ追いやるのである。そして若者達は、以前まで暮らしていた居住場所から身を引かざるをえ



ない状況に追い込まれていく。Kennellyの論考が示唆的なのは、地域に急激に入り込む五輪都市開発に従い、グローバル都市空間を受け入れようとするその大衆性は、国際的メガ・スポーツイベントとして見出された認識で働く「象徴性」が大きく関与していると指摘する点である。この視点は、ブルデューが述べる「象徴暴力」論にその原点がある。ブルデュー（1997=2009）はこの象徴暴力のシステムについて、『パスカルの省察』にて次のように述べる。

「象徴暴力とは被支配者が支配者に対して、与えないことができない同意を媒介にして成立する強制である。同意しないわけにはいかない、と言ったが、それは、被支配者は、支配者を考えるために、また、自分を考えるために、より適切に言えば、支配者と自分の関係を考えるために、支配者と共通の認識手段しか持っていないからである。そしてこの認識手段は、支配関係の構造を身体化したものに他ならないからである。言い換えれば、自己を知覚し評価するために、あるいは支配層を知覚し評価するために彼が使用する図式（高い低い、男女、白黒など）は、彼の社会的存在がその産物であるところの（自然化された）分類の身体化の産物であるからである。」

ここから、象徴暴力のメカニズムは行為者間で権力を行使する支配者側の一方的な行動によって成立するものではなく、それを受ける被支配者側の「認識」も備わって成立する概念であることが分かる。ここで注意しなければならないのは、ブルデューは例えば被支配者側が既存のルールや決まり事に納得がいかなずとも、象徴暴力はそれを両者が受容しているとみなす「強制」力が備わる、という点である。ではこの象徴暴力を、Kennellyの事例でみるとどう考えられるのであろうか。まず五輪都市開発によるグローバル都市空間の生成は、スポーツ施設をはじめとした高級建造物の増築、つまり中産階級層に向けた都市空間として生成されていく。するとそうした空間に馴染めず都市から立ち退き出ていくのは、都市野宿者や低所得者層市民がそれを「受け入れた」結果である、とみなされてしまう。すなわちその雰囲気を彼らが一度内面化した結果、それを受け入れられずに自分たちで都市を去った、という象徴暴力の構造が完成するのである。ここで重要なのはブルデューも言及していた通り、一連のプロセスは政府やエリート層が造り出す五輪都市開発という図式を、被支配者側がそれを「受け入れざる」を得ない雰囲気を巧みに醸成しつつ操作していることにある。つまり「五輪のため」という論理は、被支配者側の受け入れを自発的なものとみなす（実質的に受け入れてないとしても）構造として成り立たせるのである。彼らが置かれてきた不遇な境遇に認識的なくさびを打ち込むために、Kennellyはブルデューに倣い独自の「象徴暴力」論の展開を試みる。

五輪の象徴性は、開催都市に支配的観念となり都市開発を嫌がおうにも推し進めていく。その都市は五輪後も、「五輪開催都市」というレッテルを貼られ、造られた施設や建造物と共にその雰囲気を持続させていく。Kennellyは、対象者が五輪都市開発を受け入れざるを得ず、都市空間内の空気を認知的に了承せざるをえない形で都市から身を引かざるを得ないメカニズムを指摘した。ジェントリフィケーションによる経済的困窮も原因であるが、Kennellyはこのメカニズムに迫る中で、対象者が「日常生活のなかで、五輪によって自分たちが受け入れられていないことを経験（自覚していく）」(ibid:14)していく論点こそ重要であるという。すなわち、この都市空間の雰囲気を嫌がおうにも身体化して立ち退いかざるをえないプロセスこそが、Kennellyが主張す

る五輪都市開発が生む「象徴暴力 (symbolic violence)」そのものである。市民が本来過ごしていた地域に留まりたい思いと裏腹に、それを不可能にしていく象徴暴力の側面がここに働く。Kennellyが描き起こしたのは、五輪という象徴性が近年の都市開発を通して市民の身体的知覚にまで及び、彼らはそれを内面化しながら生活の変化という問題と向き合わなくてはならない、ということである。ジェントリフィケーションや立ち退きを受ける市民のより深い内実に迫ったKennellyは、近代五輪都市開発のこうした暴力的な様相を紐解こうと試みてきた。

以上より本稿は、先述した先行研究とブルデュー、Kennellyが述べる「象徴暴力」論に倣ってきたい。その上でまず国立競技場を含め外苑地区一帯の概要と、その象徴的意味の変容について記すことは重要となろう。なぜなら外苑地区のスポーツクラスターは、国立競技場を含む戦前から戦後以降にかけたスポーツ施設の利用史が大きく関係してきたからである。本稿で扱うデータは、筆者が2014年5月から2015年3月までに都営Tアパートで行った参与観察や文献資料収集が中心である。参与観察は、許可を得ることのできた当時の住民へのインタビューや毎週の日曜日に定期開催されていた自治会活動等に、筆者が月に平均1,2回のペースで参加させてもらいながら行った。インタビューは様々な活動に参加させてもらう中で無作為に住民の方々に話を聞いたり、様々な雑談をしたりする中で行ったため、インフォーマル・インタビューとなっている。よって事前に住民たちにアポイントをとって行うような、フォーマル・インタビューではなく、基本的には複数の住民と日常的な談話をするなかで話を聴いていたため、インタビューはフォーマルなものではなかった。また対象者個人を取り上げる際の氏名は、全てアルファベット (仮名) で表記し、許可を得たうえで談話の中でインタビューをさせていただいた。

### 3. 国立競技場の誕生とその意味

#### 3-1. 戦前における外苑地区とスポーツ化：外苑競技場の建設

なぜ、外苑地区に1964五輪の競技施設が集中していたか。それは、国立競技場の前身にあたる「明治神宮外苑競技場 (以下、「外苑競技場」と示す)」が、大正と昭和時代を結ぶ日本のメインスポーツスタジアムであったことが大きく関係する。外苑競技場は、1919年12月に工事が着工され、1924年に完成された。外苑競技場は、明治神宮競技大会など国内で開かれていた体育競技大会でスポーツスタジアムとして利用されていたが、戦時中1942年には学徒壮行会が開かれかつ日本陸軍の管轄基地となった歴史があり日本の戦時体制を整えていた場でもあった。こうした意味で、外苑競技場には大正から昭和の時代に通じる「戦争」と「スポーツ」の二重経験をする歴史が蓄積されている。壮行会や陸軍基地としても利用されていたのは1910年代以降、外苑地区で日本兵が訓練を行っていた練兵場や宿舍場が外苑地区に集住していたことも大きく関係していた (後藤, 2013: 10)。

外苑競技場が建設される前、その地区一帯は1888年に設置された「青山練兵場」という陸軍管轄の演習場が存在していた。青山練兵場は主に陸軍兵士の練兵目的で使用されていたが、1900年代前半頃から敷地範囲の拡大と共に場所を代々木へ移すことになった。新たな場所は「代々木練兵場」と呼ばれ、陸軍宿舍と刑務所が混在し青山練兵場時代よりも大規模の収容数を誇る陸軍演習場であり、ほとんどの外苑地区が陸軍の管轄下となっていた。では、その地区になぜ外苑競技場が建設されたのであろうか。それは、内務省により明治神宮内苑・外苑の造園計画が持ち出さ

れたことがきっかけであった。1917年の「日本大博覧会」に向け、開催場所に選定された外苑地区一帯は開発計画に迫られ、新たな絵画館や憲法記念館などの建造物増築をはじめ、そこに外苑競技場を建設する計画が含まれた<sup>1</sup>。外苑競技場は、東洋一の収容力を誇るスタジアムと明治神宮建立を記念するメモリアルスタジアムとして建設され、これらの目的が、日本代表のスタジアムとして外苑競技場が象徴化されてきた大きな契機であった（畑中, 2020: 26）。また外苑競技場の竣工と同時に、周辺にも新たに野球場、水泳場、庭球場の建設請願が各競技団体からあがった。1926年に明治神宮野球場が建設されると、その後相撲場、神宮プールと他スポーツ施設も相次ぎ、外苑地区は日本を代表するスポーツ施設が集中的に点在する「日本スポーツの聖地」と化していった（後藤, 2013: 30）。戦前外苑地区は、練兵場と多数のスポーツ施設が混在していた地域であった。

### 3-2. 外苑地区の戦地化と神宮大会

外苑競技場は1930年代、関東中学生選手権や日本学生選手権、全国高等学校大会（現インターハイ）などの学生大会の中心会場となった。しかし1930年代後半日米の対立が大きくなると、次第にスポーツ界も戦争による影響に巻き込まれ、外苑競技場においてもスポーツ利用がほとんどなされなくなっていった。スポーツ界が戦争による影響を受けた大きな例として、外苑競技場で開催されていた「明治神宮体育大会（以下、神宮大会と略す）」がある。神宮大会は外苑競技場で1924年に1回目が開催されてから、第二次世界大戦中であった1943年の第14回大会まで行われた。神宮大会は、大正から昭和初期にかけて行われた戦前唯一の総合体育大会として、昭和天皇をはじめ多くの皇族が関わっており、戦時下の天皇制を強める大会として扱われてきた歴史がある。

権（2021）によると神宮大会は、大正時代における世相へのデモクラシーの浸透や社会主義に基づく社会革新の思想が、青年に波及することを懸念した政府が画策した大会であった。つまり天皇主権の色合いを世相に強め、体育・スポーツを通じた「国民統制」にその意図があった。神宮大会の管轄であった内務省は、戦時下に民主主義的思想に走る青少年をターゲットに、体育・スポーツの指導・大会を通じて教育的方向に目を向けさせた。しかし神宮大会は当初の目的を失い、次第に軍事的なスポーツとしての色合いを強め、青少年を中心に日本の帝国主義体制を構築していく政治的側面が強い大会へ変貌していった。例えば1939年の第10回大会以降、従来の近代スポーツを取り入れた種目が減少して、代わりに軍訓練や集団体操、銃剣道などの軍事的利用が濃い競技種目が増加していった（同: 125）。その種目は「国防競技」と称され、手榴弾や土囊など戦争に必要な道具の導入や、「戦闘」的な実践を求める種目が増えた。しかし日本が大東亜戦争を勃発させるとスポーツ活動自体も一切中止となり、外苑競技場も学徒壮行会や武器庫の収容所として日本陸軍の「軍用地」と化した。神宮球場も同様武器・弾薬の倉庫、水泳場も兵士たちの宿舎となった（後藤, 2013: 185）。1944年から終戦以降における外苑地区は、日本の戦時的利用施設の集中する地区となり、外苑地区の「スポーツ」の意味は追いやられていった<sup>2</sup>。

### 3-3. 「再」スポーツ化される外苑地区：国立競技場の建設と1964東京五輪の意味

1945年8月終戦を迎えた日本は、実質的な米軍の占領下に置かれる中、国の「復興」に目を向けざるを得なかった。その中でも優先的な改革事項として目を向けられたのが、皮肉にも体育・ス

スポーツ界の政策であった。外苑競技場は米国の管理下のもと「ナイル・キニック・スタジアム」と名称変更され、1952年サンフランシスコ条約が締結されると日本へ返還された。その後は戦時中の爆撃で傷ついた修復作業が行われ、徐々にスポーツ競技場としての機能が回復された。戦後間もない時期、外苑地区の競技施設を復興することは「軍国主義的色彩の払拭」や「スポーツの復活、大衆化」という意味合いが強調され、敗戦後の混沌化した社会にエネルギーと希望を与える意味合いが付与されていた(権, 2021: 155)。その機運と戦後日本の「復興」の起爆剤として五輪開催は望まれ、その中心地として選定されたのが「戦争」と「スポーツ」の歴史が刻まれてきた外苑地区であった(畑中, 2020: 74)。1958年アジア競技大会の開催を契機に外苑競技場が新たなリニューアル対象となると、「国立霞ヶ丘競技場(以下、国立と略す)」と名前が変わった。そして競技場再建と重なり、1959年5月のIOC総会で1964五輪が東京で開催されることが決定した。空襲で焼野原であった練兵場跡地は、外苑地区約65000㎡の敷地に、国立競技場、秩父宮ラグビー場、東京体育館と同屋内水泳場の五輪関連競技場をはじめ、明治神宮野球場、神宮水泳場、東京ボウリング場、レスリング会館、神宮外苑テニスクラブ、明治公園などの多岐にわたるスポーツ施設や公園を集中的に点在する地区計画が打って出された。1964五輪の開催は外苑地区を「再び」日本スポーツの中心的聖地へと戻す大きな契機であった。

1964五輪は「戦争」という記憶の払拭と国際的な「スポーツ」大会を通じた、先進国日本として未来を形作っていくための二重の象徴性を帯びていた<sup>3</sup>。つまり1964五輪開催と国立競技場建設は、外苑地区を「戦争」という意味が強い地から、スポーツを通じた復興や希望という意味合いに置き換える絶好の象徴的機會となったからである<sup>4</sup>。スポーツクラスターが目指された外苑地区は、戦前から1964五輪開催までのこうした歴史が下地となっている。すなわちスポーツクラスターに内在するスポーツ優先の論理が、経済政策や健康政策と安易に結びつき、震災時の「復興」という言葉への置き換えが日本において強調されつつあるのは、スポーツの象徴的意味の変換を論理化させてきた意識が根強いからではないだろうか。しかし一方、戦争の傷跡と焼野原であったこうした外苑地区の歴史は、当時の人々にとってどう映っていたのであろうか。次節では、外苑地区霞ヶ丘町で生まれたAさんのライフヒストリーに迫ってみたい。Aさんの戦時中の記憶と、戦後の外苑地区で生活してきた実体験はどのような意味をもつのであろうか。

## 4. 外苑地区のライフヒストリー

### 4-1. 霞ヶ丘町での暮らし

戦後間もなくの外苑地区、当時住んでいた人々はどうのような生活を送っていたのであろうか。Tアパートが建設されるまで、焼野原からの復興の只中で暮らしていたAさんの生活史から紐解いてみたい。

Aさんは昭和8年に、東京都新宿区霞ヶ丘町で生まれた。Aさんの両親は昭和2年頃から同地に長屋を建てて暮らしており、兄弟構成はAさんを含めて男子9人であった。子供のころは外苑地区で木登りや、野球場や相撲場で運動をして遊んでいた。周辺には、どんぐりやしいの実が成っていた木が生えており、木の実採取もして自然が豊かであった(森, 2015: 88)。Aさんは子どもながらに、どこになんの木があり、どの実がなっていたか頭に入っていたという。当時は食料が非常に少なく、家で食べることができる分も限られていたため、こうした木の実を取って火にくべ



て食事の足しにしていた。しかし日本が第二次世界大戦を開始すると、こうした日常を送ることが困難となり、空襲や爆撃を避けるためAさんたちは山梨県に学童疎開しなくてはならなくなった。1944年の11月に親元を離れ、再びAさんが霞ヶ丘町へと戻ってきたのは1945年の5月末のことであった。その時すでにAさんが暮らし遊んでいた場所は、「焼け野原」となっていたという。Aさんの家も通っていた学校もすべて焼けてしまい、啞然としながらもその後すぐに母親や兄弟と一緒に縁故疎開として今度は福島県へ移動することになった。福島県の親戚の元で過ごし、その後中学生になった時に再び霞ヶ丘町へと戻ってきた。帰ってきてからの焼け野原での生活は、「なにもない状態」(2014年11月23日 フィールドノートより)からはじまり、Aさんたちは両親が建ててくれた焼トタン板で作ったバラック小屋で暮らしはじめた。なにもない状態でありつつも数々の戦争器具や建物の破片が廃棄物と化し道端に転がっており、バラック小屋も錆びたトタン板や釘で造られたという。小屋の広さは3畳と6畳の部屋に、土間が付いており大所帯の家族で住むのもやっとであった。こうした市民が作ったバラック小屋は、当時Aさんの家の周辺にたくさんあった<sup>5</sup>。その中で唯一、東部第7連隊という2階建ての兵舎は焼けないで残っていたという。兵舎には馬小屋が併設されていたため、この兵舎跡地には「馬頭観音」として馬を供養するための石碑が立てられた。そして、この兵舎跡地に建設されたのが、都営Tアパートであった(森, 2015: 90)。

当時戦後で食料のない時代、「食いつなぐことで必死であった」(2014年11月23日 フィールドノートより)という。お米も家族全員が満足に食べられることもなく、時には育ち盛りの兄弟が食べてしまうとAさんが食事をとれないこともしばしばあった。両親の助けとなるよう、Aさんが主に炊事当番を担っており、幼い兄弟の朝ごはんやお弁当を作っていた。電気がないため、米を炊くことは拾い集めた木の破片や枝、薪を使っていた。こうした生活の様子は、近隣の市民たちも同様であった。Aさんは中学生にあがると、うどん製造業の仕事を開始した。お客が自分でもってきたうどん粉や小麦粉を、Aさんがうどんにしてその手数料を頂戴する仕事であった。高校は、昼間がうどん製造の仕事で忙しいため夜間学校に通い、Aさんが専門学校と大学を卒業するまで学業と仕事を続けていた。戦後の霞ヶ丘町での学生時代を経て、1958年にAさんは結婚をした。新居生活として、元々家族と暮らしていたバラック小屋の近くに、新しく家を設けることになった。その時には、僅かに木造で建築することができ、半分バラック半分木造の家を親が建ててくれたという。Aさんの結婚生活は、この新居からスタートしていくことになった。

しかし思いがけない出来事がAさんを襲う。1958年、1964五輪の実現に向けて日本は招致活動に躍起になっていた。アジア大会を成功させ、次期五輪開催都市として有力であった東京は外苑地区のスポーツ施設の改修工事に勤しんでいた。外苑競技場は国立競技場としてリニューアルされ、周辺の明治神宮野球場や秩父宮ラグビー場、水泳場や代々木体育館も建設工事が施されていた。Aさんは、当時の様子を「本当になにもない状態から道路や建物も増えていって、同時に運動施設も多くなっていった。」(2014年11月23日 フィールドノートより)と語った。戦後のAさんが暮らしていた外苑地区周辺は、戦争からの復興を合言葉に、スポーツ施設の増築・建造をはじめインフラ整備や数々の建造物であふれていった。つまり戦後から1964五輪にかけての時代、霞ヶ丘町はバラック小屋での市民の生活とスポーツ施設の建造をはじめとする都市整備が同時並行で起こっていた。東京での五輪開催が1959年に決定されると、競技場やスポーツ施設以外に、さらに外苑地区の都市

改造は加速していった。Aさんたちの新婚生活は、1964五輪開催をきっかけに大きく変わっていくことになった。それは、Aさんが新居での生活を送るために建てた家が、国立競技場開発の関連敷地場所となり、そこからの立ち退きを強いられたことと深い関係にあった。

#### 4-2. Aさんの「心構え」と外苑地区の「復興」

1964五輪の開催都市が東京に決定すると、関連工事のため国立競技場周辺に暮らしていたバラック小屋の市民たちは、急遽立ち退きを迫られることになった。新居を築き、これから新しい家族で生活をしていこうと思っていたAさんも同様、焦りと不安を感じていた。Aさんが東京都から立ち退きの通達を受けたのは、五輪開催の2年前1962年頃であった。1958年に新婚生活を開始したばかりの束の間のこと、当時の立ち退きについてAさんはこう供述していた。

「…心構えはある程度、出来ていた。まあ、若いなりに、更に日本の復興のためにも、ですね。でも高齢者の方にとっては、そうではなかったはずでございます。」(反五輪の会,2014:7)

Aさんは国立競技場の近隣で暮らしながら、立ち退きがくるかもしれない「心構え」があったという。戦後の「なにもない状態」から自身の暮らしを建てつつ、その周辺が開発されていく様子を間近で見てきたAさんにとって、1964五輪が立ち退きの引き金になっていたことと、Aさんがそれを「日本の復興」と捉えていたことは重要である。外苑地区の街並みが少しずつ復興へと近づいていく様子は、若きAさんにとっては立ち退きの「心構え」をしなくてはならないほどに大きなものであった。つまり、日本中が東京五輪開催に湧く機運は、戦後日本の最重要課題であった都市「復興」を象徴するイベントとしてAさんに映っていた。Aさん曰く、当時の東京五輪開催に対する世間の機運は「強かった」(反五輪の会,2014:7)という。

「みんなオリンピックには、成功や賛成という意識が強かったと思います。テレビや新聞なんかもオリンピック一色だったし、外苑地区も開発が進む中でいろんな方が盛り上がるね、なんて言って。東京オリンピックの宣伝や広告なども多かったね。」(2014年11月23日 フィールドノートより)

戦後の体育・スポーツ界の改革は、こうした復興に向ける国民意識の向上としてメッセージ化され、五輪は日本国民を鼓舞していく最も大きな出来事となっていた。そして「戦後復興」と新たな「民族再建」が図られた政策は、体育・スポーツ界を通じ徐々に発展して、五輪として国内に浸透した(権, 2021: 153)。こうした意味合いが、戦後の体育・スポーツ界を通じて五輪に含まれ称揚されてきたことを、「戦前・戦中の日本の軍国主義的イメージを払拭し、戦後日本の『復興』と発展を世界に宣伝するとともに、国際的地位の向上を図るため、当時課題とされていた東京都の都市改造をはじめ、様々な施設の整備を進めることを可能にし、さらにそれを契機に経済を発展させるという目的があった」と権はいう(権, 2021: 185)。

すなわち1964「五輪開催のため」というコンテキストには、そのための犠牲にも目を瞑るよう、また瞑らざるを得ないよう促す意味が深く含まれていたと言える。五輪の華々しい開催は、国民

の戦後の傷跡をかき消し、未来へと力強く羽ばたく「復興」メッセージとして形を変えようとしていた。その成功も戦後スポーツの中心地となった外苑地区の体験として根強く、またスポーツクラスターを日本全国に後押しする論理の基盤となっている。1964五輪に内包されたこの象徴的なエンパワーメントは、復興のための立ち退きはやむなしという文脈でAさんにその「心構え」を強要した。そしてそのAさんの五輪への「心構え」は、五輪反対、立ち退き反対という意味表明でなく、半強制的に立ち退きは「仕方がない」(反五輪の会,2014:7)という姿勢を根付かすものとして立ち現れていた。しかしバラック小屋での生活から新居を構えたAさんにとって、1964五輪の立ち退きが容易に受け入れられるものではなかったことは、想像に難くない。

#### 4-3. 1964 東京五輪大会の開催と A さんの立ち退き

1962年以降、Aさんは新たな転居先を探すものの、すぐに新たな移転先は決定しなかった。Aさんは結婚後、奥さんと育児をしつつ、霞ヶ丘町で長年のうどん製造業の仕事を続けながら、新たに煙草屋の仕事も開始していた。そこでは、文房具や雑貨用品なども売っていた。立ち退きが通達されてからは、経営していたその店を一度閉じ「いつ壊してもいいように」とバラック小屋を建ててそこで営業をしていた。この頃は、東京五輪の改修工事も佳境を迎え道路整備や施設建設に携わっていた土建従業員や職人が商品を購入しに訪れにきていたという。その後、東京都の打診もあり立ち退きの移転先として、西新宿五丁目の古民家を勧められた。新たな新居として移る準備をしていたものの、当時そこに暮らしていた住民が明け渡しを拒み、Aさんの移転は難航を極めていた。いつ移転が決まり、新たな店舗と新居で安心して暮らすことができるのか。その当時の様子をAさんは述懐する。

「家を退かねばならない、行き先もない、商売もできなくなるというので約2年間解決するまで全然商売できませんでした。お店をやるのが出来ませんでしたので、住むところは親が用意してくれた3畳1間にですね、同じ新宿区内の信濃町に親子4人で2年間過ごしました。…(中略)…収入は商売できないですから、朝5時から5時半に起きてご飯食べた後、中野駅のそばに日産自動車がありまして、納車する車の拭き掃除をアルバイトしました。夕方までやりました。1台何百円という手間でやりましたので、その日によってお金が違うんですが、やらないわけにはいかないのでやりましたが、5時(17時)に帰ってきてご飯前に倉庫に入れておいた商品を売らなければやっぱり食費につながらないので、自転車で今のTアパートのあるところに通っていかがですか、あれはどうですか、これはどうですか、と注文を取っては配達をしました。それが終わるのが7時(19時)くらいで、ご飯が終わり子供たちを寝かせた後今度は封筒の表書きを1枚1円を毎晩11時までやりました。」(反五輪の会,2014:9)

バラック小屋からの立ち退きから、Aさんは親が用意してくれたという新宿区内のアパートへと引っ越した<sup>6</sup>。Aさんの1日は早朝から始まり、「食費」を稼ぐため日中は複数の仕事を兼務しながら、自宅での封筒の表書きが終わる深夜過ぎまで続いた。3畳一間、荷物を配置するスペースもない広さでの生活、1964五輪の開催はAさんにこの暮らしを強要する「心構え」をつくった。この暮らしから2年、耐えきれなくなったAさんは、東京都の職員に相談へ出向く。そうすると入居案

内をされたのが、Aさんが2016年の立ち退きまで暮らすこととなった都営Tアパートであった(石田, 2020)。東京五輪後、1965年の12月、Aさん一家は、Tアパートへ入居した。これを機に一度たたんでいた煙草屋の仕事も、Tアパートの敷地内にあった「外苑マーケット」の店舗として再開することができるようになった。部屋の間取りも2DK、ベランダつきとなり煙草屋も12畳程のスペースで営むことができた。

信濃町の3畳一間のスペースで生活していた頃に比べると、Tアパートでの暮らしを、Aさんは「新しくて広くてきれいな部屋でいいなあ」(反五輪の会, 2014: 10)と思った。外苑マーケットでの仕事もその頃は、八百屋、パン・菓子、時計・貴金属、魚屋、米屋、洗濯屋など、アパート住民が日常的に利用する店で溢れかえっていた。夕方18時以降には、マーケットに多くの住民が押し寄せ歩けなくなるほどに混雑していた。住民の生活に必要な商品が、Tアパートの「外苑マーケット」で賄うことができた。Aさんの戦後バラック小屋からの働き詰めであった学生生活、結婚後3畳一間の暮らしを経てTアパートへ入居することができ、Aさんは家族で過ごす安住の地を見つけたのである。

## 5. おわりに

スポーツクラスターを「市民」の視点からとらえるとどうなるのであろうか、という問いに対して本稿で明らかにしてきた点を、2つ提示しながら論じていきたい。まず1つ目は、戦前から戦後にかけての外苑地区の象徴性の変容である。1920年代に青山練兵場跡地に明治神宮造園計画の一環として外苑競技場は建設され、神宮球場や水泳場などの建設と共に外苑地区は「日本スポーツの聖地」となった。しかし日本の戦況が一変すると、外苑地区の各スポーツ施設も活動を制限され、外苑競技場も「スポーツ」施設としての機能よりも「戦争」利用が優先されていた。しかし戦争の色合いが強く残っていた外苑地区は、戦後再び「日本スポーツの聖地」として復興の中心的存在となり1964五輪開催地として都市開発が大きくなだれ込む場となった。戦争という象徴性が強かった外苑地区は、1964五輪を通した国立競技場の誕生をはじめスポーツ施設、インフラ整備によってその傷跡は覆い隠されながら地域が活性化されることで、再びスポーツという象徴性が集中的に埋め込まれてきた地区となってきた。

2つ目は、こうした変容を遂げる外苑地区の傍らにあった戦後Aさんの暮らしである。Aさんは戦前より外苑地区で生まれ過ごし、戦時中も学童疎開や縁故疎開を繰り返しながら再び霞ヶ丘町へ戻ってきた。焼野原の中大人数の兄弟とバラック小屋で暮らして、学生時代は家計を支えるため仕事をしながら学業をこなした。苦学生として過ごしながらも、結婚を機に自分の家庭と新居を設け、新たな生活を送ろうとしていた矢先、1964五輪都市開発を理由にした立ち退きに巻き込まれた。新居から追い出され、信濃町の3畳一間での生活は、Aさんから平穏な日常を奪った。その後Tアパートへの入居が決まるまでの数年間、Aさんは早朝から深夜まで働き詰めで過ごした。戦後1964五輪による外苑地区開発の歴史の一端は、Aさんなど霞ヶ丘町で暮らしていた市民の生活と共にあったと言える。そして何より、「戦争」から「スポーツ」へと外苑地区の意味合いが五輪によって書き換えられる中で起こった立ち退きに対し、Aさんが感じた「心構え」、この心性こそが重要である。1964五輪の開会式の様子をこう語っている。



「オリンピックの時は、信濃町の3畳一間に親子4人でおりました。それで、今日は開会式だなあ、ということで、裏の窓をあけまして、飛行機が五輪のマークを雲で作っていたのを見て、ああ、きれいだけれどな、なんで狭いところで見なきゃならないんだろうな、って思って見てました。子どもはかわいそうだなと思いました。」(反五輪の会, 2014: 9)

華々しく1964五輪が「復興」の祝祭として開催される中、立ち退きを強いられたAさんは3畳の部屋からその様子を観察していた。ブルーインパルスが東京の空を舞い、華麗に色分けされた五輪マークを描く様子はAさんに「きれいな景色に映っていた。だがAさんの本音は、3畳一間での暮らしになってしまった事実から抜け出せていない。復興にわき踊る機運を感じつつも、暮らしを奪われてしまった本音と共にAさんに3畳一間へ立ち退きの「心構え」をさせてしまう五輪の象徴的な力を、ここで疑うべきであろう。Aさんが立ち退きに関して示していたその「心構え」は、1964五輪による当時の外苑地区のめまぐるしい開発が戦争からの「復興」や「平和」へ塗り替えられてきたことと表裏一体である。しかし、どんなに外苑地区が五輪やスポーツによる施設化で置き換えられようと、その場所で過ごしてきたAさんの経験は深く記憶の中に残り続けていた。自然が広がり遊びまわっていた外苑地区の幼少時代、疎開後の焼け野原と立ち並ぶバラック小屋、その後の1964五輪を助長する世間の雰囲気も含め、Aさんは外苑地区での暮らしを風景の様変わりとともに体験してきた。1964五輪はAさんにとって、苦学生として過ごしやっとなんか築き上げることができた日常を一瞬で奪いとった出来事なのである。「五輪のため」という「心構え」を受け入れざるを得ず、一瞬で暮らしが変容してしまったAさんの経験こそ、1964五輪の「象徴暴力」であろう。スポーツクラスターに通底している、スポーツを優先的に考えていく象徴性を利用したまちづくりの論理は、2020五輪からもわかるようにまだ市民に「心構え」を助長させてしまう構造から抜け出せていない。外苑地区における1964五輪の経験こそ、東京都がスポーツクラスターを推し進めていく基盤を成す論理の、大きな一部となっていよう。

またもう一つの原因として、スポーツ施設や競技場が存在する限り、「スポーツ」という象徴性が永続的にまちに残存していくことも大きいと言えないか。つまり外苑地区のスポーツクラスター化の前身は、「スポーツ」という象徴性が地域の随所に埋め込まれたまちづくりであった。2024年現在、新国立競技場がどうと噂え立つ外苑地区周辺には、整備された多数のスポーツ施設、五輪モニュメントである「オリンピックミュージアム」やそれに付随する高級ホテルやマンションなどが多数建設され、グローバル都市への一端を担おうとする様相がスポーツ施設を中心として地域の物理的改変に映っている。しかし外苑地区のパターンは、WattやKennellyが示してきた、バンクーバーやロンドン五輪といった一時的に過度な五輪都市開発が入りこんでジェントリフィケーションを起こした事例とは異なってくる。外苑地区の場合は、戦後から2020五輪につながることで明らかになってきた歴史的な地区変容過程の中で、スポーツの象徴性が地区に埋め込まれ変化することを通して、まちづくりの中心的要素として「スポーツ」が掲げられてきた。つまりこの変容過程は、「スポーツ」に象徴性が組み込まれていく中に、戦後から2020五輪までの時間的要素が組み込まれ醸成されてきた。すなわち外苑地区の都市開発は、国立競技場等のスポーツ施設を中心とした「スポーツ」という象徴性が、「戦争」や「復興」という形で時代に都合よく利用されつつ変化する中で練成されてきた。外苑地区は、二度の五輪が行われた歴史をもつスタジ

アムを中心とした、戦前から戦後にかけての多種のスポーツ施設の象徴的意味合いが変容してきた経験をもつ五輪都市開発の一例である。

こうした時間をかけて残存し、そして新しくリニューアル化されたスポーツ施設を中心とする都市空間は、スポーツクラスターを支える象徴的な力を発揮して、今後も日本全国のスポーツによるまちづくりの潮流を後押ししていくのではないか。Tアパートの跡地は、明治公園となりアパートがあった痕跡はなく、あるのはAさんをはじめ市民がその地で過ごした記憶や経験である。スポーツクラスターを推し進める力が、その象徴性を駆使して市民に「心構え」を作らせるためのものであってはならない。「スポーツ」の象徴性に、過度に偏らないスポーツまちづくりの在り方を模索する必要がある。

## 註

- <sup>1</sup> このような経緯に至った背景のもう一つに、スポーツ競技を通じた明治天皇への「奉納」も重要な意味であった。明治天皇が「尚武剛健の気風を御奨励」していたこと、また古来より相撲や演劇などを神社に奉納する伝統をそのまま明治神宮にも設けようとしたのである（後藤、2017: 46）。戦前における「スポーツと奉納」という意味合いも外苑地区には存在する。
- <sup>2</sup> 神宮大会も開かれていた外苑競技場では、1940年五輪が開催される予定であったが軍事優先のため幻となった。同時に開催場所も敷地拡大が外苑競技場で難しいことから駒沢の開催予定となった（吉見、2020: 68）。
- <sup>3</sup> 浜田によると1964五輪は、その20年以上前に戦争という経験があったからこそ、その「戦争との対比でオリンピックの意義が強調されていった」という（浜田、2018: 250）。
- <sup>4</sup> 吉見（2020）は、日本人は敗戦や震災による日常からの逸脱が起けると、「何がなんでも既定の路線」を取り戻そうと必死になるという。その機会が五輪であり、「あたかもそれらが成長を成し遂げたかのような呪文」として機能したと、その象徴的な部分が「復興」などのワードとして置き換えられることが有効的に機能したとアイロニックに語る（同: 82）。
- <sup>5</sup> フリート横田（2020）によると、戦後における引き揚げて都市に多くの「浮浪者」が溢れ、仕事がなく、住宅供給が追いつかないままバラック小屋で生活していた様子は行政も黙認していた。またこうした様子は外苑地区だけではなく、東京各地の多くがそうであったことが分かる（同: 82）。Aさんもこうした戦後の生活の厳しい「なにもない」状態から、バラック小屋にて生計を立ててきた一人である。
- <sup>6</sup> 森（2015）からのインタビューも、戦後Aさんがバラック小屋に住んでいる状況からTアパートの入居まで至った背景がよく分かる（同: 88）。また1964東京五輪を機に、明治公園に住んでいたバラック小屋の住民がAさんのように立ち退きにあっていただとも言う（同: 92）。

## 参考文献

- Bourdieu, Pierre, 1997=2009, *Méditations pascaliennes*, (Collection Points 507), Paris: Les Editions du Seuil, 加藤晴久訳, 『パスカルの省察』, 藤原書店。
- フリート横田, 2020, 「横町の戦後史 東京五輪で消えゆく路地裏の記憶」, 中央公論新社。
- 後藤健生, 2014, 『国立競技場の100年－明治神宮外苑から見る日本の近代スポーツ－』, ミネルヴァ書房。
- , 2017, 『世界スタジアム物語 競技場の誕生と紡がれる記憶』, ミネルヴァ書房。
- 浜田幸絵, 2018, 『〈東京オリンピック〉の誕生 1940年から2020年へ』, 吉川弘文館。
- 原田宗彦, 2016, 『スポーツ都市戦略 2020年後を見すえたまちづくり』, 学芸出版社。
- 反五輪の会, 2014, 『都営霞ヶ丘アパート —住民Jさんが語る「霞ヶ丘町での暮らし」—』。
- 畑中章宏, 2020, 『五輪と万博 開発の夢、翻弄の歴史』, 春秋社。

- 稲葉奈々子, 2015, 「『オリンピックのため』に高齢者の住まいを奪ってよいのか ―都営霞ヶ丘アパート強制撤去をめぐる―」, 『月刊ゆたかなくらし』402, 2-5.
- 石田智佳, 2020, 「国立競技場の再開発とアパート住民の立ち退き」, 『スポーツ社会学研究』28(2), 57-72, 創文企画.
- Kennelly, Jacqueline, 2016, “Symbolic violence and the Olympic Games low-income youth, social legacy commitments, and urban exclusion in Olympic host...”, *Journal of Youth Studies* 20(2):145-161.
- 権学俊, 2021, 『スポーツとナショナリズムの歴史社会学 戦前＝戦後日本における天皇制・身体・国民統合』, ナカニシヤ出版.
- 森まゆみ, 2015, 『森のなかのスタジアム 新国立競技場暴走を考える』, みすず書房.
- 小川てつオ, 2016, 「オリンピックと生活の闘い」, 小笠原博毅・山本敦久編, 『反東京オリンピック宣言』, 航思社, 110-132.
- 大沼義彦, 2020, 「オリンピック・レガシーの生活化へ ―2012年ロンドン大会の企図と課題―」, 松村和則編, 『白いスタジアムと「生活の論理」 ―スポーツ化する社会への警鐘―』, 東北大学出版会, 273-305.
- 大島博文, 2022, 「新たな経営都市戦略としての『スポーツ・健康まちづくり』の意義と実現に向けた課題に関する考察」, 『政策創造研究』(16), 関西大学.
- 鈴木直史, 2012, 「スポーツは地域をつくるのか? ―地域課題の解決にスポーツが寄与する条件―」, 『一橋大学スポーツ研究』(31), 3-18.
- 東京都オリンピック・パラリンピック準備局スポーツ推進部調整課, 2018, 『東京都スポーツ推進総合計画』, 正和商事株式会社.
- 和田崇, 2020, 「地域活性化手段としてのスポーツ ―日本におけるスポーツの地理学的研究のレビューから―」, 『地理科学』75(1), 19-32.
- Watt, Paul, 2013, “It’s not for us: Regeneration, the 2012 Olympics and the Gentrification of East London,” *City* 17(1): 99-118.
- 吉見俊哉, 2020, 「五輪と戦後 上演としての東京オリンピック」, 河出書房新社.